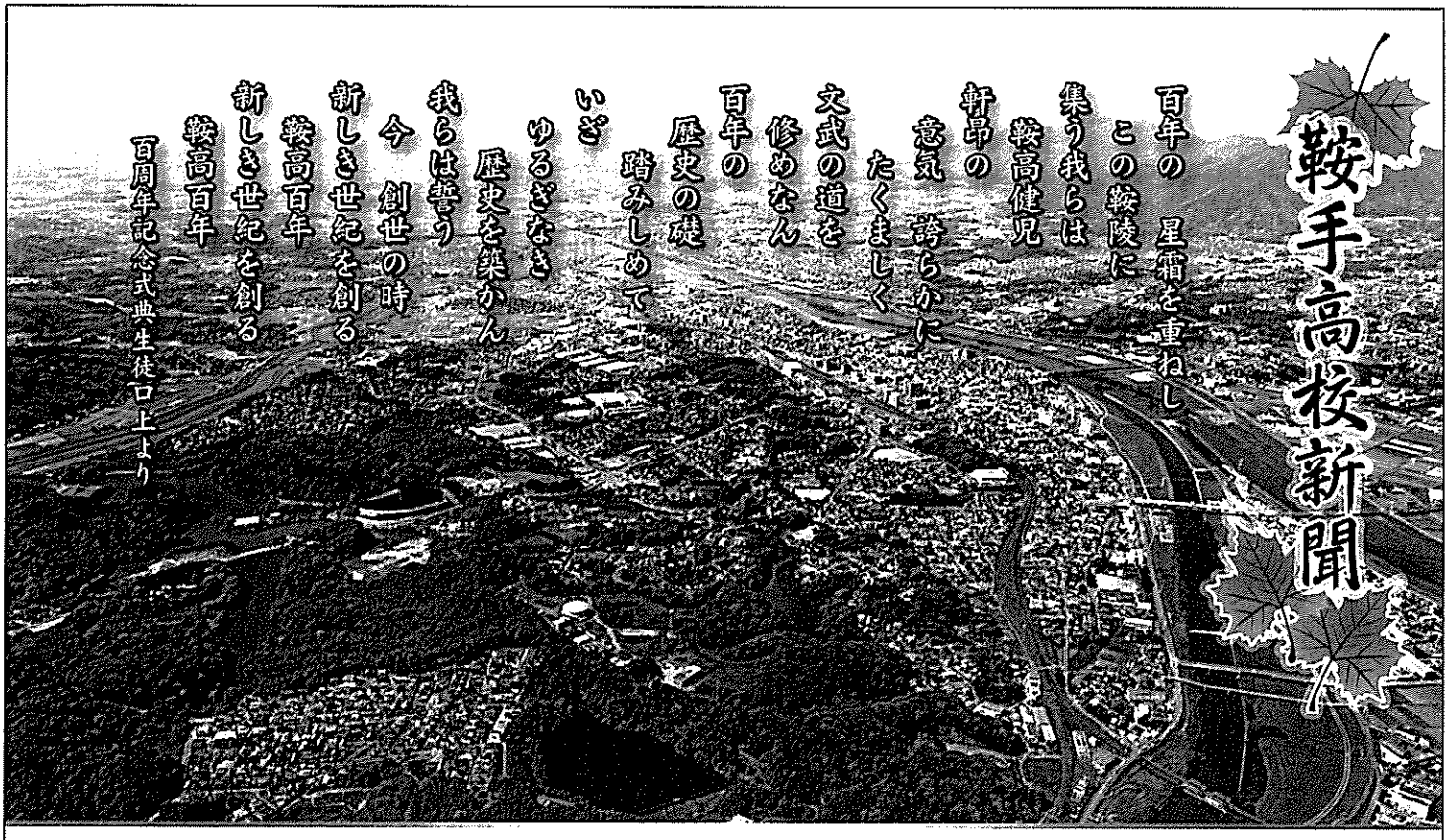


新しき世紀を創る鞍高百年

校長　清澤　亨

「新しき世紀を創る　鞍高百年」をスローガンに掲げ、本年度創立百周年の諸事業を進めてきました。これらの記念行事に臨む、真剣且つひたむきな生徒の皆さんの姿を校長として頼もしく思います。

この「鞍手高校新聞」に各行事の詳細が記載されていますが、各行事を通して、私は今の鞍高生の「底力」を感じました。吹奏楽部記念演奏会での地域と一体となった感動のフィナーレ、記念大運動会百周年プログラムでみせた一糸乱れぬ団結力も見事でした。今年は部活動でも、女子バスケットボール地区大会での終了一秒前の逆転シュート、剣道玉竜旗大会では大将戦の激戦を制しシード校を破っての四回戦進出、野球部甲子園予選では、劇的な九回裏サヨナラホームランによるシード校撃破で波に乗り、七年ぶりの県大会進出など、鞍高名物傘踊りにも歌われた「いざという時芯がある」鞍高生の心意気を大いに示してくれました。

また、記念鞍高祭の折には、毎年本校の学校行事に参加されている地域の方から「鞍高生は本当に生き生きとしていますね」という感想をいただき、たいへん嬉しく思いました。それは、県の最優秀賞を受章したSSH課題研究発表や、SGH筑豊会議での、堂々としたプレゼンテーションの姿にも表れています。

「鞍高生は行事を通して成長する」と言われます。我が鞍手高校もこの百周年事業を通して更にたくましく前進し、これからの新しき世紀を創っていく学校となることを願っています。

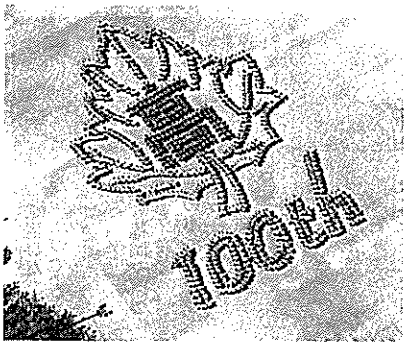
鞍陵会会長　永冨　政英

本校、玄関前に創立九十周年を記念して作られた「質実剛健」「自学自習」の校訓と「たくましき前進者たれ」の校是の碑があります。私が鞍陵会の幹事長としてお世話をしていた時に、創立九十周年の記念事業として作られた碑です。十年という年月が流れる中で、鞍高生の励みとなって社会へ羽ばたく姿を見守り、見送ってきたと考えますと感慨深いものがあります。しかし、その十年のさらに十倍の歳月をこの鞍手中学・鞍手高校は歩んで来ました。その間、二万七千名を超える生徒が巣立ち、多くの出来事が今も語り継がれています。それについては、百周年を記念して作られる校史「鞍陵百年」に編纂されています。様々なエピソードは、鞍手の生徒が幾多の困難を乗り越えていった鞍高魂の歴史でもあり、卒業生・在校生に共有される鞍中・鞍高生の誇りと考えます。生徒の皆さんも、是非一読し、未来に向かってたくましく前進するための「希望の書」となることを願ってやみません。

PTA会長　赤間　功

昭和五十二年に、本校は創立六十周年を迎え、その当時第三学年に在籍していた私は、最上級生で創立六十周年記念式典を体験しました。その時から四十年の月日が流れていったことに隔世の感を覚えます。

その当時は、一クラス四十五名の八クラス、一学年の人数は三六〇名が定員で、学校全体の生徒数が約一〇八〇名という状態でした。現在の生徒数が七一七名であるとのことに、驚きを隠せません。しかし、先日の大運動会のマスゲームや、百周年を記念した人文字などを見ても、当時と比べても決して遜色ない、いや、更に緻密でダイナミックな教育活動が展開されていることに、大いなる敬意を表するところです。少子化が叫ばれる中、今後、この地域の子供たちにも、大きな夢や希望を持たせることができるよう、私たち自身も、高校生の皆さん方と一緒になって考え、取り組んでいかなければならないと改めて感じるところです。



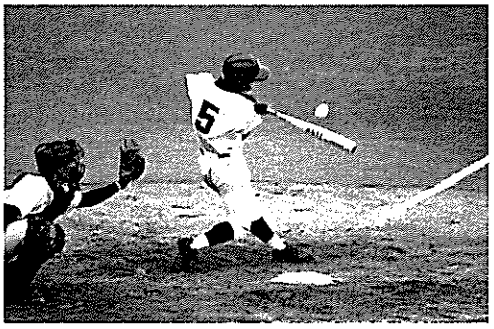
鞍高OB中西九大教授
「幸せになる努力を！」
百周年を記念し、生徒に講演

四月十四日（水）、本校百周年を記念して、高校二十四回卒業であり、九州大学呼吸器科教授、同大学病院副病院長の中西洋一さんが「これからの未来に私たちができること」と題して講演を行った。この日は、生徒・職員、保護者、そして同窓生など総勢八百名が、中西さんの話に聞き入った。自らの幼少期のエピソードや高校・大学時代の思い出を交えながら、今日、肺がんの研究や治療にどのように携わっているかなど、分かりやすく話された。また、鞍高生に対し期待を込め「生きていることはそれ自体が奇跡である。幸せになる努力をして生きがいを見つけて欲しい」と呼びかけた。

鞍手高100周年事業始まる
OB中西九大教授が講演

創立百周年記念野球大会
鞍手高校 対 田川高校
鞍高が大差で圧勝

四月二十七日に鞍手高校と田川高校が、創立百周年を記念して野球大会を筑豊緑地野球場で行った。大正六年に創立した田川高校は今年で百周年を迎え、大正七年に設立した鞍手高校は今年で百年目となる。ともに本年度に百周年記念式典を挙行することになっており、両校の校長が百周年対決と銘打ち、実施の運びとなった。両校とも、全校生徒に加え、保護者・両校OBも応援に加わり、約千五百人が声援を送った。



対戦前、田川高校野球部の小野壮大主将は、「応援してくださる期待に応えることができるように全力でプレーします」と話し、鞍手高校野球部の米田圭一郎主将は、「この機会を与えられたことに感謝しその喜びを感じながら皆さんにも感動していただけるプレーをしたいです」と語った。

開会式で、田川高校の佐藤博英校長は「記念試合を契機に両校が良きライバルとして切磋琢磨していきたい」とあいさつ、鞍手高校の清澤亨校長も「百周年に弾みをつけるゲームを期待している」と述べた。始球式では、両校長とも背番号100の各校ユニフォームを身にまとい、記念試合に花を添えた。

試合は、鞍手高校が初回に二点を先制し、その後も追加点を重ねた。田川高校も五回に犠飛で一点を返して意地を見せたが、鞍手高校が十二対一で勝利した。

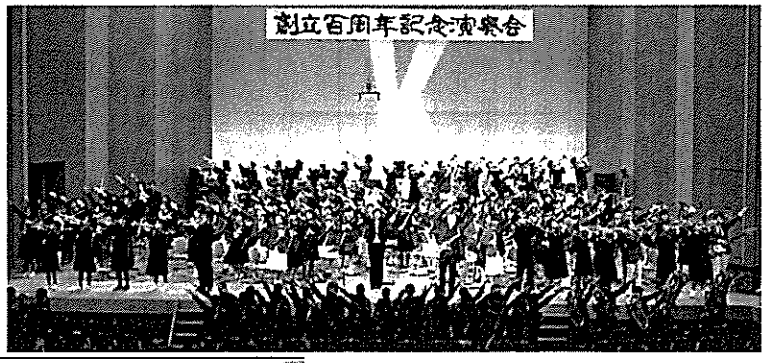
試合後、鞍手高校生徒会長の図師貫太郎さんは「百周年の節目として両校が誇れる試合だった」と語った。田川高校生徒会長の田中玲衣さんは「両校が親睦を深め、百周年をきっかけに、筑豊が活性化するよう地域に貢献していきたい」と、これからの決意を話した。

鞍手高が創立100年対決制す
軟式野球部、田川高と記念試合

創立百周年記念演奏会
中学生と共に創る筑豊の未来

去る五月七日、七百名の来場者で満員となったユメニティのおがた大ホールにおいて本校創立百年目を記念した吹奏楽部の演奏会が実施された。本演奏会では、地元、直方第二中学、直方第三中学、植木中学、宮若東中学、宮若西中学、鞍手中学、小竹中学の七つの中学校の吹奏楽部に加え本校吹奏楽部OBの永遠会が共演した。また、客演をサクソフォン・フルート奏者で音楽プロデューサー、米米CLUBのホーンセクションのBIG HORNS BEEのメンバーでもあるオリタ・ノボッタ（織田浩司）氏に依頼し、百周年の演奏会に花を添えた。

本校の清澤亨校長は「地域の活性化に貢献するための取組としてこの演奏会を企画した」とあいさつした。アンコールでは総勢百七十名の演奏者全員で「宝島」を演奏。フィナーレを飾るたいへん感動的なステージが繰り広げられた。来場いただいた方からも、「感動を共有した」「素晴らしい演奏会だった」との感想をいただいた。参加した中学生の喜ぶ姿を目にした本校の生徒・職員も、この演奏会が実施できたことに感激した様子だった。少子化など様々な課題を抱える地域ではあるが、この演奏会の盛会により地元の力強いエネルギーを感じた。



参加した中学生と本校生徒に演奏会後の感想を聞いた。

○直方第二中学校
三年　永井宥羽さん
「こんなにたくさんの方と共演することは初めてだったので、とても楽しかった」

○直方第三中学校
三年　藤原明日香さん
「とても貴重な経験だったので、楽しく演奏できました」

○植木中学校
三年　別府みほさん
「本当に貴重な経験ができ、これからはこの経験を生かしたいと思います」

○宮若東中学校
二年　長野葵さん
「オリタさんと一緒に共演ができ、とてもいい経験になりました」

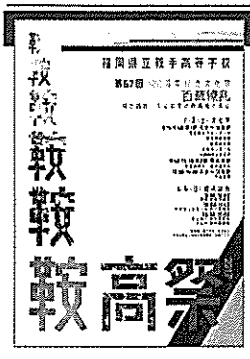
○宮若西中学校
三年早原夢恭さん
「とても貴重で楽しい経験ができたと思います」

○鞍手中学校
三年　下德邉ひなたさん
「初めての共演だったので、みんな楽しみながら演奏できました」

○小竹中学校
三年　福岡夕茉さん
「この演奏会でオリタさんやパートの先輩から多くの事を学ばせていただきました。あらためてオリタさんのサックスの音色に圧倒されました」

○鞍手高校
三年　島田舞紀
「百周年記念演奏会でたくさんの方と共演できた喜びと、このような機会に恵まれたことへの感謝の気持ちでいっぱいです」

百周年の文化祭
百花繚乱のごとく多彩に

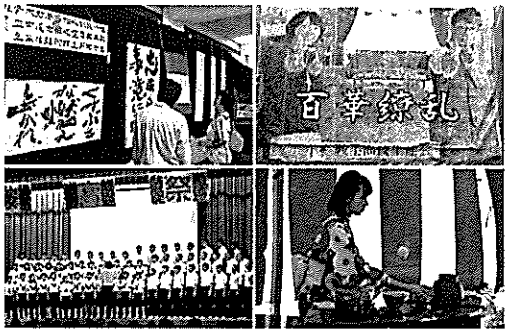


六月三日・四日に、創立百周年記念事業の一環として、鞍高祭（文化祭）が盛大に行われた。これまで積み上げられてきた百年分の熱い思いと共に、鞍高生一人ひとりが本領を発揮し、一つの大きな華を咲かせる鞍高祭を創り上げようと、実行委員を中心に「百花繚乱～咲き誇れ、百年の鞍高魂と共に～」のテーマを掲げ、様々な企画で百周年に彩を添えた。また今年の鞍高祭は、全校生徒が文化とスポーツにおいて活躍する機会とするため、一日目に文化祭として、第一部　展示の部を実施し、二日目に野球・バスケットボール、サッカー、バレーボールの四競技の招待試合を行った。

一日目　文化祭

一日目、鞍高祭校門を入ると、昨年ヒットした、ドラマ「逃げ恥」の恋ダンスが描かれた縦四㍍と横六㍍のモザイクアートが出迎え、お祭りムードを盛り上げる。

茶華道部は、地元の市民団体である「古高取を伝える会」の協力を得て、古高取の展示・説明・陶芸教室を行うブースを設けた他、藤棚下での野点を行い、多くの来場者に高取焼の茶碗で抹茶をふるまった。茶華道部部長の大塚千尋さんは「改めて高取焼について学び、その素晴らしさを再認識した」と語った。また、生け花の教室展示も行った。家庭科部は恒例となった手作りのクッキーやケーキの販売に加え、学校家庭クラブ企画として、アトリエ・ブランシュの野崎由美子先生（高三十回卒）の指導で作製したプラタナストレーやカップを販売するなど「地元の文化を知り、体験できるもの」を工夫した取組となっていた。



書道部のパフォーマンスや合唱部の合唱が披露された。その他、書道部や美術部の書や絵画の展示、文芸部が部誌の「雑木林」販売と栞づくり、放送部の全国大会等出展作品の放映、ESS部の英語と触れ合う企画、SSH部の科学実験の演示など、工夫を凝らした取組で見る者を楽しませてくれた。

本校では、全校生徒を三つの分団に分け、様々な学校行事で互いに競っている。この鞍高祭でも、合唱コンクールやKURAKOUシネマズ（ムービーコンテスト）に加え、分団ごとのテーマに沿った教室展示や十万本のツマヨウジのモザイクアートでその出来栄えや完成度を競った。

合唱の部は、課題曲「今、咲き誇る花たちよ」自由曲・青分団「友、旅立ちの時」赤分団「なんでもないや」黄分団「ヒカレ」、優勝は青分団であった。

教室展示の部のテーマは青分団「直方」、赤分団「アダムとイブ」黄分団「スペースシャトル」、優勝は青分団であった。

グラウンドでは、吹奏楽部のマーチングの華麗なパフォーマンスと演奏が繰り広げられた後に、SSH部が打ち上げるペットボトルロケットの「パン」という音が響き渡っていた。体育館のステージでも、吹奏楽部の演奏、教室体験の部のテーマは、赤分団「いざ、鞍鉱山トロッコアドベンチャー鞍高の歴史探険」、青分団「謎の侵略者、現る トリックアートの世界」、黄分団「鞍高百執念お化け屋敷」であり、優勝は赤分団であった。

また、KURAKOUシネマズの優勝は黄分団であった。

文化祭委員長の三年、富永虎太朗さんは「春休みから動き始め、百周年の節目の年に自分たちしかできない文化祭を作り上げたいという気持ちでやってきた」と胸を張り、同じく三年、宮川純奈さんは「百周年ということで、地域の方などたくさんの皆さんに来ていただけるよう、何度も何度も企画を練ってきた」とこれまでの苦労を語った。

二日目　招待試合

二日目の招待試合については、直方高校の野球部、小倉高校のバスケットボール部とサッカー部、八幡高校のバレーボール部を招いて、実施された。

野球は直方高校と対戦し二十対〇で鞍手高校が勝利、バスケットボールは小倉高校と対戦し八十一対四十二で鞍手高校が勝利、サッカーは小倉高校と対戦し三対三で引き分け、バレーボールは八幡高校と対戦し一対二で八幡高校が勝利した。

各試合とも全校生徒の応援に応える熱戦を繰り広げ、見応えのあるものとなった。選手は自信溢れる表情で声援に応え、百周年記念の鞍高祭を締めくくった。

熊本・大分地震の被災者へ
鞍手高校生徒会が直方市長に義援金託す

先日行われた鞍高祭で、多くの皆さんに協力をいただいたKurate Hearty Campaign「熊本・大分地震被災者の方々への義援金」を六月十四日、全校生徒を代表して生徒会が日本赤十字社直方地区長でもある壬生隆明直方市長に手渡した。

義援金の内訳は、鞍高祭募金四五、九七四円、茶華道部二五、〇〇〇円、家庭科部一〇、〇〇〇円、家庭クラブ委員一、〇〇〇円、アルミ缶リングプル二二、六八〇円であり、総額一〇四、六五四円となった。

本校生徒会長の図師貫太郎さんは「熊本・大分地震のことは決して忘れていないことを被災地の皆さんに伝えて欲しい」と話した。

熊本・大分地震の被災者に義援金
鞍手高生徒会

県立鞍手高（直方市山部）生徒会の図師貫太郎会長らが日、同市役所を訪れ、熊本・大分地震被災者支援として義援金10万4651円を日本赤十字社直方地区長でもある壬生隆明市長に手渡した＝写真

生徒会は、3日開催の同校創立100周年記念文化祭で、来場者に義援金を募った。茶華道部は茶会、家庭科部は菓子の販売を行い、その収益金なども義援金に加えた。図師会長は「熊本・大分地震のことは決して忘れていないことを被災地の皆さんに伝えてほしい」と話した（木下良弘）

躍進　鞍高部活動

本年度は、本校が百周年を迎えたという勢いもあり、様々な部活動が好成績を上げた。そこで、上級大会出場の部活を紹介したい。

七年ぶりの県大会出場

野球部は、今年の高校野球選手権福岡北部大会でシード校の八幡高校をサヨナラホームランで下した勢いそのままに、七年ぶりに県大会出場を果たした。惜しくも、県大会の初戦で福大大濠高校に敗退するも、新聞には、全校応援の様子や、データ分析で勝利を支えた野口竜太郎選手の記事が掲載された。

福大大濠 好投で8強

データ分析 選手鼓舞

九州第一位で国体出場

弓道部の3年佐々木祐輔さんは、国民体育大会えひめ国体の弓道競技少年男子の部に出場した。また、その国体の選考会では、九州の選りすぐりの選手の中で、遠的、近的とも一位の成績を収めた。

マーチングで全国高文祭

吹奏楽部は、マーチング部門で福岡県代表となり、宮城県で行われた全国高等学校総合文化祭（みやぎ総文2017）に出場した。パレードでは、本校吹奏楽部が楽天イーグルスとソフトバンクホークスの応援歌を演奏し、沿道からは大きな声援をいただいた。

九年連続全国大会

放送部は、NHK杯全国高校放送コンテストに、ラジオドキュメント、テレビドキュメント、総合テレビドラマの3部門で県代表として九年連続の出場を果たした。

また、全国高等学校総合文化祭には、二年小栗琴音さんが朗読部門で出場した。

全九州高総文祭に出場

書道部の2年峯岡杏路さんは、沖縄県で開催された全九州高校総合文化祭、書道部門の席上揮毫大会に出場した。九州各県から集まった八十名の代表生徒が制限時間2時間の中で、指定された漢詩や短歌の出来映えを競う。地元沖縄の新聞には峯岡さんの様子が掲載された。

80人、一筆入魂

百周年記念大運動会

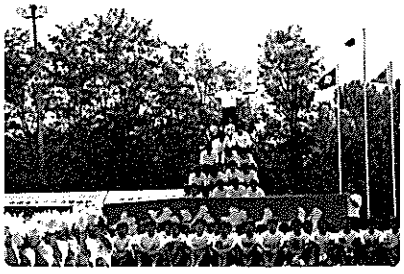
第七十回大運動会

九月九日に鞍校百周年記念第七十回大運動会が開催された。今年は百周年ということもあり例年以上の大変な盛り上がりを見せた。そのため毎年行われている通常のプログラムである

百・二百メートルリレー
男子スウェーデンリレー
女子スウェーデンリレー
分団対抗リレー
綱引き
綱盗り
バラエティ競争
騎馬戦
男子マスゲーム
女子マスゲーム
応援合戦

は各分団が競いあい、一人一人が全力で競技に臨んでいた。

また今年は特別なプログラムである、百周年「たくましき前進者」が企画され、今まで競い合っていた三分団がここで一丸となり、女子は華やかさを、男子は力強さを披露した。この百周年という特別な大運動会で素晴らしい演技を魅せてくれた。



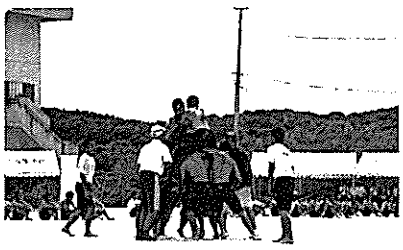
総合結果

黄分団	1088
青分団	1158
赤分団	1245

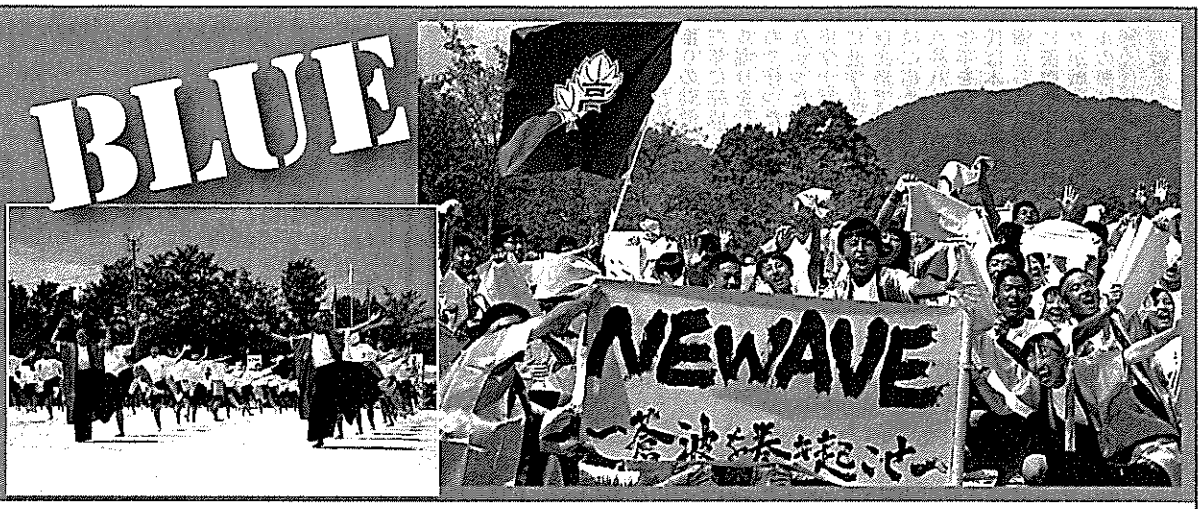
赤分団優勝！

本校第二十七代　森　英一　校長
百周年記念大運動会を詠む

秋の雲
見下す校庭（にわ）に
駆ける子ら
飛躍秘め
集合演技のたくましさ
息吹き新たに
快進誓う
雲晴れて
ラッパのマーチ
天を突き
飛躍を願う
念正の秋（とき）



BLUE

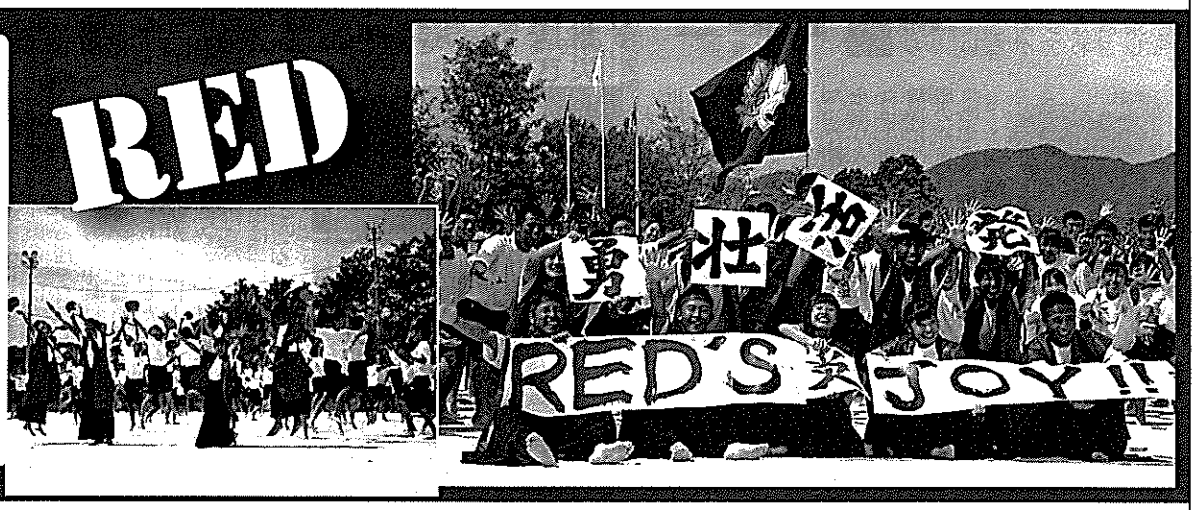


青分団の応援はとても力強くパワフルで、腰に着けていた青いタオルを使い、青分団のスローガン「NEWAVE」という言葉通りに大きな青い波を見事に魅せてくれました。また、一曲目からその場に居る人々を巻き込んでしまうような爽やかさのある応援でした。

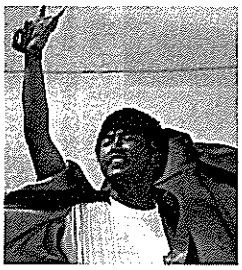
YELLOW

黄分団の応援では外国のスクールミュージカル調のパフォーマンスで一人一人が軍手を着用し女子はハチマキを頭の上でリボンにしたりするなど観ているこちらまで一緒に踊りたくなりました。そのため今年の応援の部では見事に黄分団が優勝しました。

RED



赤分団の応援では祭りのような賑やかさのあるパフォーマンスで、また赤分団はうちわを使用し「happyな半被」という曲に合わせて元気よくワッショイ!と叫ぶ姿がまさに勇壮活発でした。そして、「ずっこけ男道」という曲では男女がペアとなり大きなハートを完成させるなど微笑ましい一面もありました。



各分団長へのインタビュー

質問内容
- ●リーダーとして、今回の運動会はどうでしたか？
- ●来年はどのような運動会にしてほしいですか？

青分団長　下元　悠也

○非常に忙しかったが、自分らしい分団を作り上げられたと思う。本当に最高の思い出となった。

○今年の百周年大運動会を超え、観る人を感動させられるようなものにしてほしい。

赤分団長　深町　斗夢

○辛いことや辞めたいと思ったこともあったが、赤分団の皆にそして先生方に支えてもらって大運動会を成功で終えられたので感謝してもしきれない。

○来年の運動会というよりは、分団長には頼る事の大切さを感じてほしい。自分一人では何事も成功しないし、そのことによる無力さを感じることもあるだろうけど、支えてくれる人がいることを忘れないでほしい。

黄分団長　秋吉　遥人

○学校行事では一つも優勝出来なかったが、優勝したいという想いは誰に負けていなかったと思う。同じ目標に向かって頑張る団員を見ていると疲れもなくなり、心の底から黄分団長で良かったと今でも感じる。

○百周年ということで注目を浴びた大運動会だったが、真価が問われるのは百一年目の運動会だと思っている。自分たちが鞍高に残したものを継承・発展させていくことが、二年生の役割だと思うので、百周年を「超越」してもらいたい。

鈴懸の並木

本校第二代の石塚校長が、大正十一年に校門から現在の御館橋の前にある雲心寺までの約五〇〇㍍にプラタナス（鈴懸の木）の植樹を計画し、二㍍間隔で苗木が植えられた。校歌にその鈴懸を歌い込んだ伊馬春部氏も、毎日のように肥料（町で集めた馬糞）や水をやって育てたことを思い出し「当時は鈴懸の稚木を守るのがやっとだった」と語っている。その後、並木は大きく成長し、昭和五十年代まで校門坂は、鈴懸の枝葉がつくるトンネルが夏の涼を誘った。

一昨年、最後まで残っていた鈴懸も幹が朽ち果て切り倒されたが、その残った幹から再び枝を再生しているのは驚きである。今となっては、校門の両脇に残るその二本だけだが、鞍手中学の先輩から私たち後輩へ、時代を超えた絆を繋ぐ役割を果たしている。そんな鈴掛の木に先輩の姿を重ね、改めて鞍中魂が今も息づいていることに気付かされる。

特集

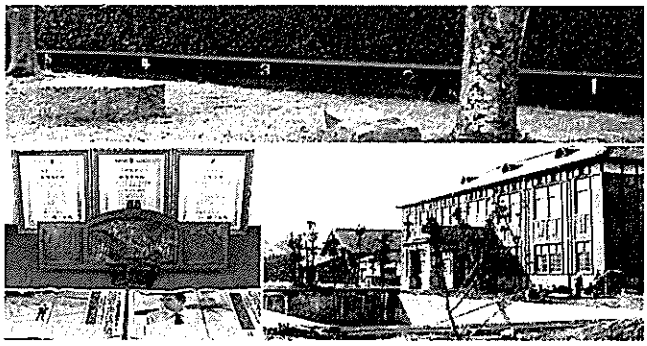
鞍手高校の歴史に見る「鞍高魂」とは

鞍手高校には様々な歴史が語り継がれている。創立百周年を記念して編纂された「鞍陵百年」の中にも、数多くのエピソードが掲載された。鞍手高校の歴史としてあげられる中から、現在に受け継がれる「鞍高魂」とは何かを考えてみたい。

世界記録と旧プール

現在、本館前の流水庭園のわきに、コースナンバーを記したコンクリートの旧プール跡を見ることができる。この旧プールは、昭和二年に県内の旧制中学では三番目となるプールだったが、着工後、なかなか工事が進まないため、生徒たちがプールの素掘りの勤労奉仕をかって出て、昭和三年に完成したものだ。当時、プール堀りをした中学六回生は、自分たちで作ったプールで泳ぐことはできなかったが、このプールで練習した中学十五回の天野富勝氏は、日体大に進学し、昭和十三年に一五〇〇㍍自由形で世界記録を樹立、先輩の功績に応えた。この時の記録一八分五八秒八は、古橋広之進が破るまでに十年を要する大記録であった。天野氏は本校卒業生で唯一、世界記録を樹立した人物であるが、昭和十五年に優勝を期待された東京オリンピックが戦争のため中止となり、金メダルの夢は断たれ、自身は戦地に赴いた。

戦後、「母校から名選手が出て欲しい」と世界記録樹立のレリーフを本校に寄贈している。天野氏とその活躍の陰にある先輩の姿に鞍中魂を見ることができる。



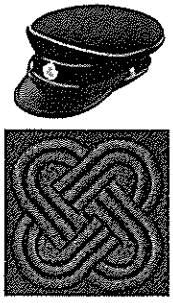
校章の制定

昭和二十三年、学制改正により、新制鞍手高等学校としての発足に伴い、新しい校章が制定された。このデザインをしたのは、当時、本校で美術教師をしていた中学十三回の画家、鵜飼毅氏であった。当時を振り返り、「デザインを公募したが応募も少なく、困り果てていた。頭を冷やしに校門を出たところ、何気なく鈴懸の並木の枝を手に取って歩いた。するとプラタナスの若々しい力強さと、くっきりとした形が訴えてきたように感じ、デザインがひらめいた。新生『鞍高』にピッタリだ」と後に語ったという。これもまた、時代を超えたつながりを感じるものだ。それと同時に、校章としては他校に例を見ないほど斬新なデザインであり、私たちもこの校章を誇りに思う。

制帽・腕章

男子の制帽には鞍手中学時代から白線が三本入っている。これは、「真・善・美」の三つを象徴している。この「真・善・美」を理想ととらえ、これを求めようとする活動が物事の本質であると、かのギリシア哲学者のプラトンは唱えた。すなわち鞍高生として、「真」の学問、「善」の道徳、「美」の芸術を追求して欲しいとの願いがこめられている。

また、女子の腕章も同じく三本のラインで四葉のクローバーがデザインされている。これは、男女共学となった際、女子もこの「真・善・美」を取り入れたものをと、高校四回の女子生徒が校章をデザインした鵜飼毅氏に談判して作られた。セーラー服の襟を縁どる三本の赤いラインと共に女子生徒の気概を示すものだ。



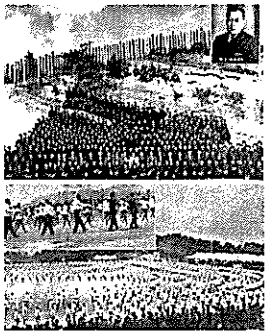
三度の火災

鞍手高校の歴史を語る上で、火災の悲運を忘れるわけにはいかない。

最初の火災は昭和三十二年四月二十九日二十一時半出火。中校舎の二棟十四教室を焼失。それから三週間経った五月二十日午前〇時半出火。北側の二棟九教室を焼失した。度重なる原因不明の火事に見舞われ、翌日登校した生徒の多くは、焼け落ちた柱から立ち上る煙を目にしながら呆然と立ちすくみ、中には泣き出す女子生徒もいた。なす術もなくやがて運動場に集まり整列した時、当時の橋口生徒会長が壇上に上がり、生徒を見まわし「みんな、鞍高は焼けても鞍高魂は焼き尽くせない」と絶叫した。その後は、校庭におえつの波が広がったという。

火災後は柔道場などの広い部屋に近隣の学校から机や椅子を集めて授業をするなどしたが、どうしても教室が足りなかった。そこで、当時一年生（高校十二回）の男子は、日吉町から頓野の新校舎への移転途中であった直方高校の旧校舎を借りて、分散授業を行った。また、教員は九カ月の間、鞍手高校と旧直方高校を自転車で行き来しながら授業を行ったと話す。また、体育の授業はすべて焼け落ちた瓦礫の撤去に使われた。その際、大量に出てくる黒焦げの柱が山のように積み上げられた。

その当時、鞍手高校には外柵はなく、どこからでも入れる状態で、二度の不審火を経て防護柵が必要との声が上がった。そこで、焼け落ちた柱を生徒が一本一本を担いで地中に打ち込んでいった。「三度の火災は許さない。みんなで学校を守ろう」と防護柵を作った。その当時の三年生が残した卒業写真には石炭の層の崖に打ち込まれた柵を前に撮られているものがある。彼らは火災後に、交代で不寝番をしたとも話す。



またこの年の十月に行われた大運動会で、鞍高の再建を期して全校生徒・職員で「鞍高笠踊り」を披露し、火事になんか負けないという鞍高生の気概を示した。

こうして復興も進み、教室校舎が再建された昭和三十六年十一月十日未明、三度、本館から出火し全焼した。この本館は建設当時、鞍手郡内で最も大きな建物で、一階は校長室や職員室、二階部分には図書館や講堂を有していた。広い空間を持つ木造建築のため、火災の勢いは想像を超えるもので、その炎はまるで天をも焦がすかのようであったという。

火災後の一番の苦労は、生徒の成績などすべての資料が失われたため、受験に必要な調査書が作成できないということだったが、当時の先生方は、全国の大学に「火災による原簿消失で選考の不利にならないように」と嘆願書を送ったという。この時の高校十四回生も鞍高魂を発揮し、受験でも好成績を収めた。

鞍高魂とは何か

こうした先輩諸氏の苦労の歴史のもとに、私たちの鞍高は今年百周年を迎えた。来年度には、百周年を記念して多目的アリーナが建設されることが決まった。旧本館で焼失した講堂がようやく鞍高に戻ってくる、そんな思いがよぎるのも、鞍高生だからかもしれない。

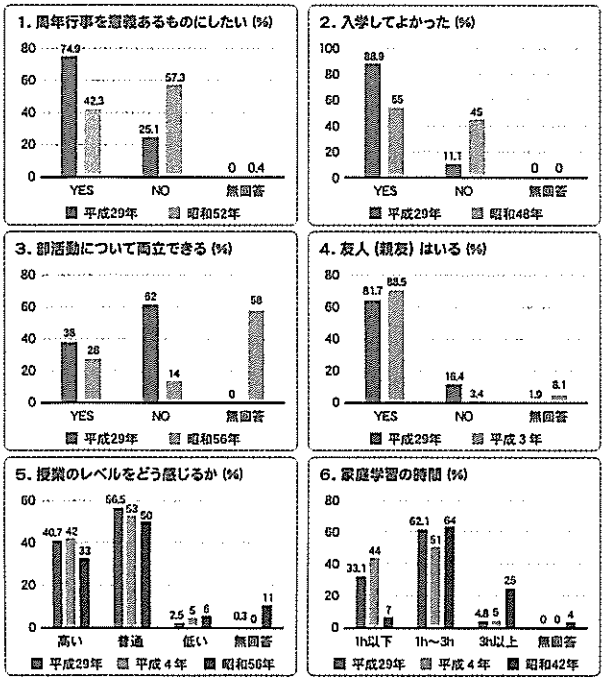
鞍手中学、高校の歴史は、まさに、何もないところから、または、すべてを失ったところから、生徒自身の手で創り上げて来た歴史であり、これこそ鞍高魂というものなのではないだろうか。

一方、現在の鞍高生も先輩方に負けていない。鞍高祭や大運動会などの学校行事はもちろん、SSHやSGHの取組も、生徒一丸となって新しいものを作り出そうと頑張っている。そういった意味で鞍高魂を引き継いでいると思う。ただ、これまでの先輩方が勉学に励み、高い進学実績を残しながら、様々な苦難を乗り越えてきたことを決して忘れてはいけない。まさに、「二兎を追え」の精神を貫き通さなければ、鞍高魂とはいえないだろう。

鞍高生の現状と過去

アンケート調査

本年、文化祭の生徒会企画で、過去の鞍手高校新聞で生徒に調査された項目について、今の鞍高生にもアンケートを行い、当時の鞍高生と比較が行われた。新聞部としては、再度、このアンケート結果を分析し、私たち鞍高生としてのあるべき姿を考察したい。



1 周年行事について

本年は、創立百周年の記念行事が多く行われてきたが、その周年行事を意義あるものにしたいかという調査が、創立六十周年の際、清澤校長先生が在籍していた昭和五十二年に行われていた。六十周年と百周年の規模の差は大きいかもしれないが、明らかに現在の鞍高生は、周年行事に対して意義を感じ、良いものにしようと取り組んでいるようだ。

＊＊＊＊＊＊

2 学校への満足感について

この内容については、昭和四十八年に入学してよかったかという調査が行われている。これについても、明らかに現在の鞍高生の方が満足感を持っているといえる。当時と比較して学校行事の種類に関しては、そう大きな違いはないが、現在行われている分団制などの取組がよい結果に表れているとも考える。

＊＊＊＊＊＊

3 勉学と部活動の両立について

この調査については、昭和五十六に行われており、それと比較すると、現在の鞍高生は明らかに両立できていないと回答した数が多い。昭和五十六年当時は、無回答が半数以上いることを見ると、当時の鞍高生は両立しなければならないとの思いに多くの生徒が悩んでいたと想像する。逆に、現在の鞍高生は、両立などできないと諦めてはいないだろうか。

＊＊＊＊＊＊

4 友人について

友人（親友）がいるかという調査については、平成三年に調査が行われており、現在の鞍高生の方がいないと答える数が多い。平成三年当時は、携帯電話やスマートフォンがまだ存在しない時代であったが、逆に今よりは生徒どうしのつながりがあったのではないかと考えられる。今後、学校への携帯・スマホの持ち込みに関する議論が行われるが、こういった点も考慮しなければならない。

＊＊＊＊＊＊

5 授業のレベルについて

この調査については、平成四年と昭和五十六年にも調査が行われている。大きな傾向は変わらないが、だんだんとレベルが高いや、普通と回答する生徒が増え、低いとする数が減少している。一概に、授業のレベルが同じはないため、比較できないが、昔に比べて教育内容全般が易しくなったといわれる中で、この結果は重く受け止めたい。

＊＊＊＊＊＊

6 家庭学習時間について

家庭学習時間については、平成四年と昭和四十二年で調査がされている。平成四年に比べると、現在の鞍高生の方が、すこし家庭学習時間が多いようだ。しかし、昭和四十二年当時は、三時間を超えている生徒が二十五％以上を占め、うち六％が五時間以上であった。当時の鞍手高校新聞では、一時間程度の家庭学習しかしていない生徒が七％いるとして、問題視されているが、現在の状況をどう感じるだろうか。当時は今と違って、家庭の自家用車の送迎や電子辞書などのない時代だ。確かに勉強をするにも効率が悪い時代であっただろうが、高校生として勉学に費やす時間は本当にこれでいいのだろうか。あわせて、当時の新聞には他校の学習の平均時間が記されており、筑紫丘高校は二時間、東筑高校は三～四時間とある。

SGH中間発表

「筑豊会議」地域巻き込み 筑豊の未来を考える

七月十五日、ユメニティのおがた大ホールで、SGH事業の中間発表となる筑豊会議が行われ、高校生が主体となって将来の筑豊・直鞍について熱い思いを持って、議論を深めた。

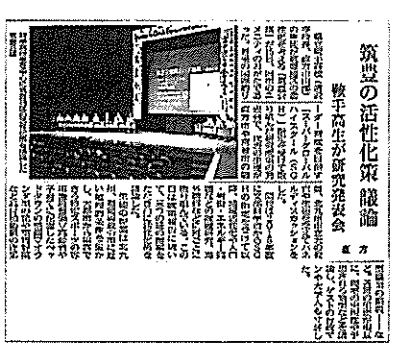
この日、第一部としてアルピニストの野口健氏を招いて基調講演が実施された。野口氏は「富士山から日本を変える～グローバル社会を生きる君たちへ～」と題して講演をされ、富士山やその広大な裾野における清掃活動を例に挙げ「こつこつ」の上に更に「こつこつ」と積み上げていくことの大切さを訴えた。

また、自身の生い立ちや、アルピニストとして死を目の前にしながらの体験など、貴重なお話を伺うことができた。「知ってしまったら、背負っちゃうんだよね…」とあっけらかんとした口調で語られたが、エベレストや富士山の清掃、熊本大分地震や九州北部豪雨災害などの被災者支援、さらには太平洋戦争の戦没者の遺骨調査・収集など、その信念を持った様々な取組に感心させられた。

第二部では、これまで取り組んで来たSGH事業における課題研究の成果報告を行った。ドリームプラン班からは「筑豊全サイクリングロード計画」、フットパス班からは「宮若市の魅力に触れあえるフットパス」、人間文科コース課題研究班からは「『JAMP』in Singapore」の発表を行い、地域やグローバルな課題について、その解決に向けた研究成果を披露した。また、SSH課題研究発表、カナダ留学体験報告、SGHシンガポール・マレーシア海外研修報告など、多岐にわたるSGHの取組を報告した。

続いて、行われた「高校生が主催する『筑豊会議』」では、直方市や宮若市の地方行政に携わる職員、大学の関係者及び学生を招いて、鞍高生とともにパネルディスカッションを行った。このパネルディスカッションでは、課題研究を通して直鞍の地域活性化を目指した「都市部からの集客施設開発の在り方」「大都市からのレジデンシャルエリアの創設」「農業によるデイリーニーズの供給」などの提言を行い、専門の方からも意見をいただきながら議論を深めた。

来場いただいた地域の皆様からも、「高校生がここまでできるとは驚いた」「もっと多くの行政の方や専門家の方の意見を交えて行うと素晴らしい会議になる」など、貴重なご意見をいただいた。この「筑豊会議」を通し、高校生であっても地方創生に主体的に取り組んでいかなければと、改めて認識するとともに、そのような我々の姿勢を、地域の皆様にも応援していただいているんだということに、自信を持った。


筑豊の活性化策 議論
鞍手高生が研究発表会

SSH部　福岡県理数科課題研究発表会

独創的な研究で 最優秀賞を受賞

六月十六日に嘉穂高校で行われた平成二十九年度福岡県理数科課題研究発表会において、本校理数科の研究が最優秀賞を受賞した。今回受賞した研究発表を行ったのは、三年一組の宮本颯大くん、安部健人くん、坂口優馬くん、原田聖志くん、舟山彦太くんの五名。「プラタナスの夜明け～プラタナスを用いたコバルトイオンの回収に関する研究」というテーマの研究発表を行った。発表会を見られた校長先生からも、「本校の課題研究発表は、地道にコツコツと取り組んできた研究はもちろん、発表能度の面でも最優秀に相応しいもの。特に都会の高校生からの厳しい質問に対して、本校生徒のまじめで誠実な受け答えと研究に対する強い信念も、高い評価につながった」と感想を述べられた。

生徒会

六十八代の生徒会は、旧生徒会長である図師貫太郎さんをはじめ総員二十九名で活動していた。今年は百周年ということもあり責任とプレッシャーで大変な一年であったと想像できるが、それを克服し時間がないながらもやりがいを持って鞍高百周年を築きあげていってくれた。

旧生徒会長は新生徒会へ「我々三年生が卒業したら、二年生が中心となって鞍手高校の先頭で引っぱり、その土台部分を新生徒会が築いていってほしい。」と語ってくれた。

次世代へバトンタッチ

新生徒会長
西田 龍ノ心

鞍手高校の新しき世紀の一歩を新生徒会三十四名で踏み出していけるように、生徒会が土台となってサポートしていきます。また自分にしか出来ないことを成し遂げていきます。

新副生徒会長
大島 真希

会長や生徒会全員のサポートはもちろん新しい世紀のはじめである百一周年という年を活気あるものにしていきたいと考えます。そのために新たなことに挑戦し、革新していきたいと思っています。

新副生徒会長
末延 美鈴

生徒会三役の目標である"Next One"を達成させるために一つ一つの活動を生徒会全員が全力で取り組めるようにサポートしていきたいです。また副会長として各委員長が困っていることがあれば、いち早く気づき一緒に仕事が出来ればいいなと思っています。

鞍陵五十年讃歌

(一)
不知火　つくし　筑豊の
　真中を占めて
鞍陵の歴史は
　はやも　五十年
　ああ　五十年
燦として輝く　理念
　そのまま　永久永劫に
伝えなむ　この誇り
　鞍手　鞍手
　鞍手のスピリット
讃えなむかな　心より
　われらが母校
　わが鞍手

(二)
不知火　つくし　筑豊の
　真中を占めて
鞍陵の歴史は
　はやも　五十年
　ああ　五十年
ゆるぎなき　礎のもと
　尊しや　先輩後輩
築き来し　この伝統
　鞍手　鞍手
　鞍手のスピリット
讃えなむかな　心より
　われらが母校
　わが母校

福智山
　また、遠賀川
すずかけの風も
　さやかに
言寿ぐ如し
　今日の祝典
言寿ぐ如し
　今日の祭典

昭和四十二年
伊馬春部　作

セピア色に変色した、創立五十周年記念新聞の表紙を飾るのは、プラタナスと50をかたどる人文字の写真。そして、それを背景として朗々と刻まれた「鞍陵五十年讃歌」である。鞍手高校の校歌を作詞した伊馬春部氏が、五十周年を記念して書き下ろしたものだが、そこにある言葉は、五十年が経過した今も色褪せることなく、「鞍高魂」を掻き立ててくれる。

そこで、百周年を記念して発刊される鞍手高校新聞の最後に、この「鞍陵五十周年讃歌」を掲載することとした。その讃歌の五十年を百年に置き換え、鞍手高校の生徒としてのあるべき姿や本校や地域の未来について思い描いて欲しいと願う。

※「不知火」は、つくし(筑紫の国)の枕詞として使われる。

＊編集後記＊

今回、百周年記念新聞の制作に携わらせて頂いた新聞部の二年二組 石山優香と倉石広海です。制作自体、初めてだったので色々と大変で不安もあり、先生方にご迷惑をかけてしまいました。しかし、無事新聞が完成した今、達成感とともに喜びに溢れています。多くの人がこの新聞を見てくれることを願うと共に、協力してくださった方々に感謝いたします。

鞍高百周年
記念新聞